

国木田独歩の

佐伯での生活（二十七）

山内 武 麒

（賛助会員・佐伯市城下東町）

十六日の記には

「吾」の上に行はる 宇宙の法則を見よ。生れたり、生長せり、老ひつゝあり、而して死。

「吾」が周囲の宇宙のものを見よ。月、星、地球（吾の住地）、草木、禽獸、光、熱、流れ、音響、大空無限のもの。此の法則と此の現象を見よ。

と、宇宙の法則とその現象を考へて、では、この「吾」とは何か、と、今更乍ら吾とは何ぞやと問い直している。

次に

平家物語を読んでその没落の有様を述べている。

亡ぼされたもの、亡ぼしたものの、勝ったもの、敗れたもの、今どこにあるか。物語は空しく子孫から子孫へと伝えられて、その子孫もつぎつぎと何処かへ消えていく。

只だ月は白く風は清く宇宙にある。人の命、人の命運、その生滅の法則は結局何か。

吾はこの「事実」の支配の下にある。宇宙は全体である。神は全体の主人である。凡ての過去の歴史もこの全体の一部である。生れた人は死ぬと云つても人である。

と、人の命のはかなさを嘆いている。平家物語の読後感である。

次に

中桐確太郎君に手紙を出す。

昨日国元から夏ものを送ってきた。今日は心地悪く熱があり胸が苦しかったので学校を休む。

今夕方夕日を追うて少し谷間を散歩した。

夕陽は美なり殊に木の芽、青く繁り、麦黄に熟したる今日今頃の夕陽はひとしほ美なり。

と。

中桐確太郎に出した手紙の中に

此秋は上京致す積りに御座候。鶴谷学館も此夏かぎりにて閉校寧ろ廃校致す事と存じ候故に小生教師の務めは是非とも此七月限り也。夏は国元の山水海潮に身

心の健康をもとめ秋に至らば収二と共に再び君を見るを得ん。快話静談の期も遠からざる也。

友なくば何が都の秋の月

と、書き、学校の紛争は一応おさまったことを告げて、

八九名の有為の青年小生を愛し小生を信じ小生も亦た心を尽くして職に当り甚だ幸福の有様に御座候間御安心あれ。先々々の日曜日は山に登り、先々の日曜は幽溪を探り先の日曜は舟遊致し候。をかしきは小生兄弟が常に案内者となることに候

と、日曜日毎の周遊のことを報らせて

決して最早田舎には出掛けぬ積りに候

田舎程馬鹿者とわからぬ奴の多きはなし。カーライルの所謂遅鈍の王国とは実に吾国の田舎を云う也と、佐伯を辛辣しんちやくにけなしている。

十七日

厭き厭きする。人生は単調でありながら複雑し、人間は意志薄弱で無智である。であるから厭き厭きするのである。

しかし自分はこれを打消して云う。

されど吾は存在す。吾は命を有す。吾は宇宙のうち

に在り。

と、どんなにもがき悲しんでも失望しても、結局吾は吾、存在は存在、生命は生命、死は死、宇宙は宇宙であるのみである。

立てよ、堅く立て。かくして吾又た奮然として起ちぬ。

と、厭々する気分をはらって勇氣を出せと自分に戒めている。

次に

過去の人々の歴史を読む時、益々人間が生存する不思議を感じる。しかし、自分は

嗚呼吾、生存す。吾吾を見しぬ、此の天地間に。

吾は逝かん、何処に逝かん。

凡て人類の逝く処にゆくのみ。

人、吾、二義にして一義のみ。

此の吾は甚だ高き使命を帯ぶるを知るべし。

嗚呼人間の生活！

聞けよ、かの歌を、彼等は楽しく歌ふ。

嗚呼人の生活！人の命。神は高し、善なり。

と、達観して生きるのみであると自覚している。

十八日

昨日「竹取物語」の第三の一節を作った。

源平時代の風儀について知りたいので国史眼を読んだ。大日本史など読みたいと思う。その過去の人々の生活の真相について自分は甚だ暗いことを覚った。

「梶原景時」(戯曲)を作ろうと思う。だから平家物語を読み、歴史をひもとく。

あ 過去にも「人間」があつたのだ。

梶原・義経・文覚、今何処にあるか。しかし宇宙は在り人間はあり、過去にも人間があつた。

過去・過去、幽玄な言葉である。幽玄なる過去よ。

仰いで天を見る過去なし、月を見る、過去なし、地を見る過去なし。

しかし過去はある。

人間は「時」の子である。時を通して人間を見、また時から離れて人間を見よう。

と、過去を偲んでいる。

次に

妄想の呼吸よ去れ

妄想は自殺なり

見よ、世人滔々是れ自殺の徒に非ずや

爾、何を恐れ何を憚る

將に此の間を濶歩せよ

と、妄想を戒めている。

次に

吾今寂莫の谷を独歩し歸りて此の筆を採る也。

と、書き出し寂莫の谷(岡の谷)を独りで散歩し歸つて恐ろしかったことを記してある。明治二十八年の三月と四月に雑誌「精神」に載つた「苦肉の叫び」の中に収録されている。

戦慄は吾が頭心より足爪先に及び吾をして幾度か勇を鼓せしめたれど吾遂に恐怖の爲めに勝たれぬ、言ひ甲斐もなき事なる哉

吾何故に恐ろしきやを知らず、只だ夜蔭は恐ろしげ也。墳墓と森林とは何故に夜に於て恐ろしきか。

嗚呼高天の下、上帝の宮に在りては吾は恐れぬ。

されど吾発見を得たり

吾が知らざりし高き真の世界は吾が恐怖の閨門の奥に在り。寂莫として只だ森と溪流と星影と月光と谷風と 声と高天と吾との世界の如何に真実の世界よ

若し吾に一点愚かなる恐怖の念なく、心まことに寂寞を愛し、静かに森の下に星影と月光のもとに眼を開きて沈思するを得ば吾が地上の俗世の感染衣は全く落ち、存在の真感に入り、神、自然、人間、吾が使命等に付て更らに大に発明すべきだ。

然り。吾が真の書籍、真の教、真の世界は吾之れを発見せり。深夜城山の上に在り、月下、無人の森林に在り。

「吾」は実に此の世界に在りて発見し得る也

これよりは冷風を愛する夏来る也。よし吾此の世界に入らん。

「恐怖」！実に吾が信仰の極めて弱きを証明す。

信仰とは空言なる哉若し此の社会と境遇と宇宙の何れの処にあるとも一点の恐怖の念にあらば信仰は、空言なり、「神」とは空言なり、「神」とは暗きと無意義の神のみ、愛は無意義のみ

「恐怖」よ去れ、爾若し去らずば吾が胸を検査せざる可からず、吾は何故恐怖するかと

月は人間の敵か、星は人間の敵か、暗き森と、さゞめく溪流とは人間の敵か、大空は人間の敵か、暗き影

は人間の敵か、「偶然」は人間の敵か、墳墓の白骨は人間の敵か。

静かに深く之を思ふべし

嗚呼敵か、敵に非ずんば何ぞ

敵か何故に敵か

嗚呼天地間に於ける人間、爾は小なる哉、恐怖と、無明とは爾を小にす。

一怒濤風浪の破船の甲板の上に於て恐怖するものは誰れぞ。深山絶莫、猛獸出没する時に於て恐怖するものは誰ぞ。吾人は勇気を欲せず、必ずしも勇気を望まず只だ信仰を希ふ

嗚呼、此の天地。人間の存在。精神情欲互に關係する処何処ぞや。

恐れ、いらだち、争ひ、そねみ、悪み、苦しみ、焦がれ、時に幻の如き喜びを喜び、以て其の生命を消す吾とても然り。

抑も此の生存は空か

空とは空の事なり。空とは空なり

吾たしかに茲にあり、

また次の十九日の記も「苦悶の叫び」に収録されている

十九日の記には

嗚呼、森これ何ぞ 吾と何の関する処ある。

嗚呼山谷、これ何ぞ吾と何の係はる処ぞ

老梟、月明、寂寥、これ何ぞ

真の信仰よ来れ、真の直感よ来れ、真の希望、直の

喜びよ、真の安心よ来れ、

今又寂寥の谷を歩いて帰りぬ。

名月に際す。吾が夜の最も美なる時なり。

恐怖は去りぬ、されど全く去らず、

今夜は杉の森を過ぎて坂の頂の平場に出でたり

人生は真面目なり。

吾白状す、吾未だ寂寞なる山林月光のもとに神を感

ずる能はず、吾に断じて大なる、堅き、真の信仰ある
なし。

只だ自然は冷々然たり、黙々乎たり、只だ夫れ悠々

として無限を感ず

吾が魂何処にある、吾が霊何処にある、

吾は小なる哉、吾は只だ五官により周囲のものを多
少さぐるに過ぎず、吾が眼は只だ星と大空と月明と森

と、墳墓とを見るのみ。是れ何ぞや、吾は更らに深遠
なるものを見る能はざる也

嗚呼吾肉体は小なる哉、此の冷然たる土魂すら吾が
肉体を永久に埋むるに一杯の土を要するのみ、見よ月
光のもと墳墓は累々たり、されと寂々として只だ夫れ
石のみ、嗚呼人何処にかゆきし。

吾も亦た只だ此の石とならんのみ。

物質は小なり。森林も月も山も、只だ物質とする時
は如何に人間の世界は狭くして浅き事よ

吾、此の吾只だ此の狭き浅き世界に苦しみて葬らる
べきに過ぎざるか

神あるか、靈魂あるか

嗚呼此の存在の意味如何

寂寞の境に吾が情は只だ荒れ只だをの、く。嗚呼愛
何処にある、美何処にある。

と、ある。

以上が「苦悶の叫び」に転載されている。僅か訂正さ
れているだけである。

十八日と十九日の二晩、夜更けて一人で岡の谷を散歩
して恐怖の念におそわれたのである。何故こんな恐ろし

かったのかと帰宅して考え、その感懐を率直に披歴してある。累々と墓の立ち並ぶ寂しい谷間を一人で歩いて、しかも真夜中に歩き肝ためしをしたのかも知れない。

二十日

自分は今もう十数日前に一編のドラマを著作しようとした。八月三十日まで書き上げなければならない。これは読売新聞社で募集している懸賞著作に応ずるためである。自分に戯曲の才があるかどうかはわからないが、とも角全力を注いで試みようと思っている。懸賞に失敗しても利がある。過去の生活を通して人間の命運、性情、品格、精神を見ていくのが史劇の本色ではないか。作劇は人間を学ぶことである。もし岩のような堅い信念に立ち、縦横に筆をふるい、人生の心理を發揮するのは、天の命である。天よ 出来得るならばこの自分に命じ給え 作劇は今の自分にとっては文学を学ぶことである。この宇宙における人間、その存在を学ぶことである。劇は芸術である。高い理想と美砂とをこの上に發揮するものは詩人ではないか

日本、支那、印度、自分は東洋の宗教の上に立つ、そ

の上西洋の哲学詩文を研究している。真理と信仰は自分ともにある。

吾進まん 嗚呼吾進まん

と、懸賞著作に応募しようと大いに意気込んでいる。

この募集はこの年の一月一日に歴史小説とその脚本とを募集して、高山樗牛の「滝口入道」が二等に入選したが、一等に該当するものがなかったため、四月十五日に再募集した賞金百円、締切は八月三十一日であった。

独歩はこれに応じようとしたドラマは前述べたように「梶原景時」であったが、この作は結局未完成で散逸し
たらしい。

